地域に協同の　心をはぐくみ　明るくたのしく

いっしょにCOOP

2017
4
TAKE FREE

特集

沖縄を知ろう！番外編
ベトナム戦争と沖縄ー

《コープ千石センター（鶴岡）》
1977年くらしのセンターと改称した初めてのセンターとして、千石センターがオープン（450坪）。1998年6月の改装を経て、2013年9月2日、建て替えの為取り壊し。2014年6月4日、新・千石センターオープン。

P2 「伝えたい～わが家のレシピ～」
「～庄内浜の味～」
P6 COOPの産直「飯豊ながめやま牧場」
P8 組合員活動NEWS
P10 共同購入からのお知らせ
P11 組合員の声室通信
P12 こ～ぷ委員会&子育てひろ場紹介
P13 短歌&川柳
P14 おしゃべりコーナー Chatter Box

組合員の伝えたい ～わが家のレシピ～

こごみのごま和え

材料
こごみ …… 100g
ごま …… 大さじ1
醤油 …… 大さじ1
砂糖 …… 大さじ1
酒 …… 少々

作り方
1. こごみはきれいに洗い、水気を切る。
2. 鍋にお湯を沸騰させて塩小さじ1（分量外）を入れ、1.のこごみを入れてさっとかき混ぜ、色が鮮やかになったらザルにあげる。
3. 2.のこごみを3cm幅に切る。
4. すり鉢でごまをよく擦り、醤油、砂糖、酒を加え更によく擦り混ぜ、最後に茹でたこごみを加えて、和える。

※茹ですぎると食感が良くなくなるので、注意する。

［春の山菜レシピ 1］

その他の料理法
- くるみ和え
- おひたし
- 天ぷら
- みそ汁の具

【春の山菜レシピ 2】

その他の料理法
- きゅうり、生姜と浅漬け
- 天ぷら
- ごま和え
- くるみ和え

うるいのお浸し

材料
うるい …… 100g
かつお節 …… 少々
醤油 …… お好みで

作り方
1. うるいは根本のうすい皮（はかま）を取り除き、良く洗って、水気を切る。
2. 鍋にお湯を沸かし、①のうるいをさっと茹で、直ぐに冷水にさらす。
3. ザルにあげて、よく水気を切る。
4. 3～4cmの食べやすい長さに切りそろえ、器に盛って、かつお節と醤油をかける。

※茹ですぎるとしゃきしゃきした食感が無くなるので注意する。
※生姜醤油やマヨネーズをかけても美味しい。

うどの酢の物

材料
うど …… 2本（中）
きゅうり …… 1本
酢 …… 大さじ2杯
砂糖 …… 80～100g
レモン …… 1/2個
塩 …… 少々

作り方
1. 酢・砂糖・塩で甘酢を作り、レモン汁を絞って加える。
2. うどは皮を剥き、短冊切りにして、水にさらしておく。
3. きゅうりを輪切りにしておく。
4. 2.のうどと、3.のきゅうりの水気を切り、1.の甘酢に入れ、味をなじませる。

※みかんの缶詰めなどを上に飾ると見栄えも良い。

［春の山菜レシピ 3］

その他の料理法
- 天ぷら
- きんぴら
- 煮物
- くるみ和え

生協・庄内浜文化伝道師が伝える

伝えたい ～庄内浜の味～

桜マスの塩焼き

材料（2人分）
桜マス …… 2切れ
塩 …… 少々

作り方
1. 桜マスをお好みの厚さに切る。
2. 塩少々を振り、焼く。
3. 器に盛りつけ、お好みで青味を添える。

桜マスの煮付け

材料（2人分）
桜マス …… 2切れ
煮汁（醤油1：みりん1：水6の割合）
片栗粉 …… 少々
にら …… 1/2束

作り方
1. 煮汁の材料を鍋に入れ、煮たたせる。
2. 桜マスの切り身に片栗粉を薄くまぶす。
3. 1.の鍋に、2.の桜マスを入れ、再び沸騰したら火を弱め、アクを取りながら12～13分煮る。（片栗粉をまぶすと煮崩れしにくく、味が絡まりやすくなる）
4. にらを茹で、食べやすい長さに切って、煮付けに添える。

伝えたい ～わが家のレシピ～ 募集中！

伝えたい～わが家のレシピ～のコーナーでは、組合員の皆さんの「わが家のレシピ」を募集しています。その他にも、こんな料理の作り方を聞きたい、こんな特集をして欲しいなどのご要望もお待ちしています。

募集内容:①山形県内で食べられているもの　②各地域に伝わる季節ごとの伝統食・行事食　③旬の食材・地場の食材を使った、各家庭に伝わる創作料理・デザート　など

応募方法:14ページの宛先に、おはがき、封書、メール等で、①お名前 ②連絡先 ③レシピ名 ④材料（できるだけ詳しく）⑤作り方　⑥レシピにまつわるエピソードなどを記入の上、お送りください

桜マスのさばき方

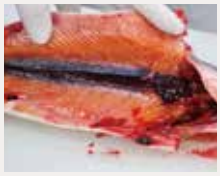
①桜マスは、

②包丁の背でうろこを取る

③エラを外す

④腹を切り、

⑤内臓を取り出す


⑥血合いを包丁で掻き出す

⑦水できれいに洗う

⑧頭を取る

⑨背骨に沿って包丁を入れる

⑩反対も同じ要領で切る

⑪3枚になる

⑫カマを切り落とす

⑬腹骨を薄く切り落とす

⑭3枚おろし完成

※あらも煮付けて食べると美味しい

特集・沖縄を知ろう！番外編

※協力：コープおきなわ

ベトナム戦争と沖縄Ⅰ

米軍のあらゆる軍事機能を負わされた沖縄

◆ベトナム戦争と枯葉剤

第一次インドシナ戦争で、ベトナムが南北に分断された後、北ベトナムの共産党政権が南に及ぶことを強く警戒したアメリカは南ベトナムを支援し、1964年8月、「トンキン湾事件」を口実に北ベトナムを爆撃。1965年2月からは恒常的な「北爆」を行い、本格的に軍事介入を行いました。

アメリカ軍はベトナム戦争で「枯葉剤」を使っていました。この枯葉剤を撒布する作戦に最初につけた名称は「ヘイディーズ（ギリシャ語でハデス＝地獄）作戦」。しかし、広報担当からの指導が入り、「ランチハンド作戦」と改められました。

▲ランチハンド作戦による枯葉剤散布の様子

使用された枯葉剤の全体の60％を占めていたのが、高濃度のダイオキシンを含む「エージェント・オレンジ」。（その毒性は、猛毒で知られるイペリット、サリンや青酸カリよりも強く、10億分の1グラムで、癌、胎児の奇形を含む先天性異常を引き起こすとされている）

アメリカ軍は、1962年1月から10年間で1万9905回に渡り、主として南部・中部ベトナムに7600万リットルの枯葉剤を空中散布しました。（一部他の撒布方法も行われた）撒布は、住民がほとんどいないジャングルに使用したとしていますが、実際の1／3は食料生産地を標的としていて、米、トウモロコシなどの耕作地に散布されました。南ベトナムの農民が土地を放棄し、米軍が実質支配する都市部へ流入するように仕向ける狙いがありました。

1966年には、枯葉剤の補給が追い付かずに底をつき、製造工場は24時間フル操業の状態になりました。軍用に除草剤を供給した会社は、米国のダウ・ケミカル社、モンサント社を含む37社にのぼり、カナダ、ニュージーランド、日本にも生産拠点が置かれました。

この霧状に撒布された枯葉剤を繰り返し全身に浴び生き延びたベトナムの人々の多くに、クロルアクネ（ダイオキシン被爆により発生する特異な皮膚疾患）の他、通常見られない重い皮膚疾患、種々の癌、妊娠中の異常、流産、早産など、多くの健康被害が現れ、催奇性は2世代のみならず3世代にも影響を与えています。

また、枯葉剤の被害に遭ったのはベトナムの人々だけではなく、撒布した側の米軍兵士も健康被害で苦しめられました。この無差別大量殺人には、アメリカ国内始め世界中から批判の声が上がりました。

◆太平洋の要石　沖縄

アメリカ軍がベトナムで北爆を開始した年の1965年7月28日の朝、台風を避けるためとしてグアム島から沖縄・嘉手納基地に飛来していた「黒い殺し屋」とも呼ばれたアメリカ軍の戦略爆撃機B52　30機は、その翌日、ベトナムを無差別攻撃しました。爆撃は、29日午前7時15分から8時5分まで行われ、約5百トンの爆弾を投下し、昼過ぎには嘉手納飛行場へ戻ってきました。

日米安保条約の取り決めでは、米軍が日本を防衛する以外の目的で、日本国内の基地から戦闘作戦行動を行う場合は、事前に日本政府との協議が必要、との決まりがありますが、この頃、沖縄はアメリカの施政権下にあり、安保条約は適用されていなかったため、そのため「事前協議をしなくても沖縄の基地から直接戦闘作戦行動に発進しても問題はない」というのが外務省の見方でした。

B52はその後も台風を理由に嘉手納に飛来しました。そして、1968年2月、グアム島付近に台風はないにもかかわらず、次々と飛来したB52は毎日編隊で離陸し、ベトナムへ飛び立ち、また戻ってきました。以来立ち去る気配はなく、そのまま居座ったのです。

沖縄からベトナムまでの往復時間は約4時間。米軍の太平洋軍司令官　ユリシーズ・グラント・シャープ大将は「沖縄なくしてベトナム戦争を続けることはできない」と話しました。沖縄は、紛れもなく米軍のベトナム戦争の戦略基地、B52の爆撃拠点でした。

◆B52墜落事故

1968年11月19日、午前4時18分頃、嘉手納基地の滑走路から離陸しようとしたB52が墜落して爆発しました。機体の破片は周辺に飛び散り、原野火災が発生し、約1時間にわたって燃え続けました。

爆風は4キロ四方に及び、嘉手納基地周辺の民家は窓ガラスなどが破損し、けが人も出ました。爆発音はゴザ市内（現・沖縄市）にまで大きく轟き、アメリカ軍の発表では、乗員7名のうち2人が重体になったそうです。

住民は、「原爆が落ちたのではないか」「ベトナムからの報復攻撃ではないか」と逃げ惑ったといいます。当時、嘉手納基地近くの知花弾薬集積所には核兵器が貯蔵されていました。もし、墜落方向が後500メートルずれていたら、沖縄は地図上から消えていたかもしれないのです。

◆沖縄の「ベトナム村」

アメリカがベトナム戦争に本格的に介入する1960年代、米軍はベトナム戦争のゲリラ戦訓練などのために、沖縄本島の北部訓練場（ジャングル戦闘訓練センター）に通称「ベトナム村」を設置していました。ここでは、ベトナム風の家が再現され、家畜なども飼われていました。また、地元の住民がベトナム人役で徴用され、「演習場に住民が近付かないように見張る仕事」と紹介されましたが、実際は亜熱帯の森に入り、そのまま15日間、ゲリラ戦の訓練に参加させられたとの証言もあります。

64年8月、米統治の最高責任者ワトソン高等弁務官がベトナム村で模擬ゲリラ戦を視察した際、6歳の幼児を連れた女性を含む、高江の住民約20人が動員され、ベトナム人役をさせられました。

周辺には、落とし穴や罠も多数仕掛けられており、木材の斬り込みに入った住民が穴に落ちて重傷を負ったり、訓練中の兵士が演習場から外れて民家近くまで迫ってくることも度々あったそうです。

そして、訓練場では枯葉剤の試験噴霧をしていた、との退役軍人の証言もあります。現に東村・高江には、1960年代半ばまで米軍提供区域だった場所で、草の生えてこない区画がいくつかあるそうです。

◆目に見えない恐怖

1968年7月21日、沖縄本島中部の具志川海岸で、那覇から夏休みの臨海学校で来ていた小学6年生237名が海に入ってから20分後、事件が起きました。子ども達は唇が腫れ上がり、目は充血して痛み、中には火傷の症状が酷く、入院した子どももいました。原因はよく分からず、化学薬品も疑われました。

▲琉球朝日放送のホームページより

この事件と同じ時期、近隣の水田で奇形のカエルが数十匹発見されました。多くは多肢で、子ども達には「具志川蛙」と呼ばれました。

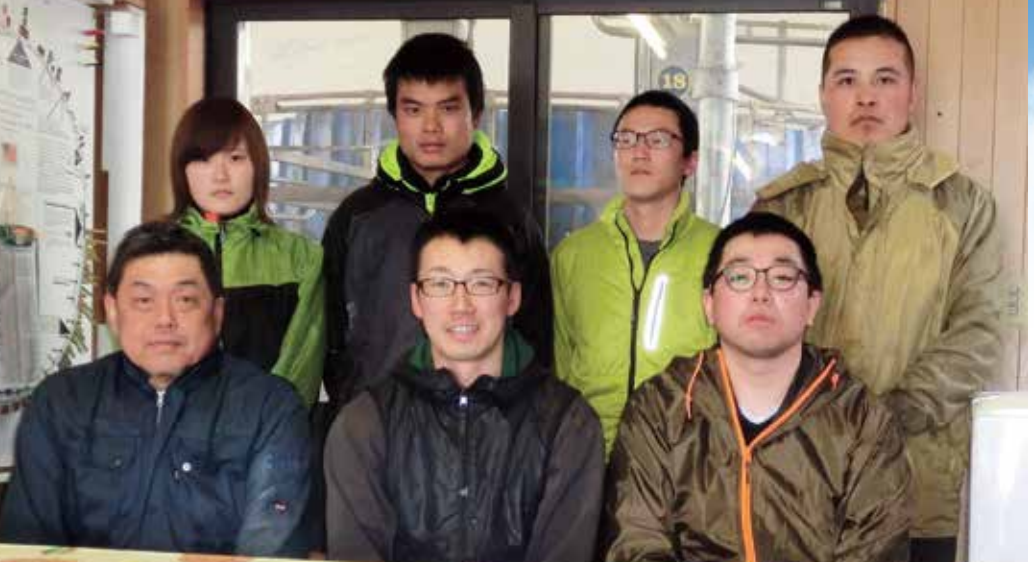
知花弾薬庫は、具志川海岸からわずか10キロの距離にありました。

（つづく）

「飯豊ながめやま牧場」レポート

～よりストレスの少ない、健康的な飼育を目指して～ おいしい牛乳とヨーグルトの里

今回は、共同購入とセンターで「放牧酪農牛乳」と「放牧酪農プレーンヨーグルト」でおなじみの、「飯豊ながめやま牧場」を訪ね、最近増設工事が完了し稼動を始めた牛舎の飼育状況や、今後の構想などについて、遠山場長にお話をうかがってきました。



▲飯豊ながめやま牧場　職員のみなさん

ひろくなった牛舎でのびのび

ながめやま牧場では、今回の牛舎の増設工事によって牛舎面積がおよそ1682坪から300坪以上増え2000坪近くになりました。目的は、飼育頭数を増やし生乳の出荷量を上げることもありますが、最大の目的は一頭当りの牛舎での飼育面積を、以前は畳2枚分ちょっとだったものを、今回の増設で畳3枚分くらいと25%ほど広げて「ゆとり」ある飼育をすることで、より健康的でストレスが少ない飼育環境を確保するためだそうです。ながめやま牧場の牧草地の面積は、44ha（東京ドーム10個分弱）と広々としていますが、広い牧草地に放牧できる春～秋の雪の無い時期はいいのですが、牛が寝床である牛舎に戻る夜間や、積雪量の多い冬期間は終日牛舎で過ごします。そのため、牛が過ごす時間の多い牛舎面積を増やして一頭あたりの飼育面積を拡げることが重要だったのだそうです。今回の牛舎増設で牛舎面積も増えましたが、飼育頭数自体は300頭から320頭にしか増やしておらず、その分牛がのんびりと過ごすゆとりスペースが増えたというわけです。（日本の乳牛飼育の平均的な一頭あたりの飼育面積は畳1枚半～2枚分くらいだそうですが、これと比較するといかにながめやま牧場の牛がゆとりある飼育環境にあるかがわかります）遠藤場長いわく、今回の増設で更に占有面積が増えたおかげか、飼育している牛の乳量も増え、顔つきも心なしかおだやかになったように見えると嬉しそうに話してくれました。

▲広くなった牛舎内

様々な工夫でストレス削減

ながめやま牧場では、この他にもストレスを少なくするための工夫として飼育面積だけではなく一日の搾乳量や搾乳時間にも気を使っています。搾乳量については、多い牧場では牛一頭あたり一日35kgほども搾るところを、ながめやま牧場では26kgまでにしています。また、「パーラー」と呼ばれるメリーゴーランドのように牛がまわりながら搾乳できる設備を導入することで、より搾乳時間を短縮できてストレスが減るようにしています。

また、牛は体温が38度と高いために、寒さには強いのですが、暑さには弱いため、暑さ対策が課題になっていましたが、今は屋根にスプリンクラーを設置することで、牛舎内の温度が上がり過ぎないよ

▲搾乳場（パーラー）

うにすることで、夏場の牛舎内の快適性を高めています。

更には、牛の個体差（個性）にも気を配る飼育を心がけているそうです。たとえば、配合飼料が大好きな牛もいれば牧草が好きな牛もいるし、小食や大食漢の牛もいる、また広い放牧場でのびのびするのが大好きな牛もいれば、牛舎からあまり出たがらない牛もいるのだそうですが、そういった牛の個性に合わせて無理に外に出さないなど、無理強いをしない飼育を心がけていると遠山場長は話していました。

更なる自給率向上を目指して

ご存知の方も多いと思いますが、ながめやま牧場では自給率向上を目指し、自家栽培のデントコーン（飼料用とうもろこし）の他、県内産はえぬきの稲わらやエコフィード（食品残渣飼料＝県産おから、りんご果汁などの搾りかす、宮城県産のモルトかすやビールかす等）を給仕していましたが、現在は山形県産の飼料米も10％ほど配合することで更に食料自給率を高め、今では配合飼料の60％以上が国産化されているそうです。酪農放牧牛乳やプレーンヨグルトを利用されている消費者の皆さんは、単においしいというだけではなく、より安全安心な食品を求めている方々が多いので、今後も更に国産や県産の度合いを高めていくことを目指していくそうです。

若手酪農家が運営

最後になりますが、ながめやま牧場では2006年から放牧酪農に取り組んでいて2010年には㈳日本牧草地畜産種子協会から「放牧畜産実践農場」の認証を受け、本州では3箇所のみ、東北では唯一の「放牧畜産基準」を満たした牧場です。現在ここを運営しているのは総勢で9名・平均年齢は30代前半（牧場長の遠山場長も39歳）の若手の酪農家たちです。遠山場長自身も就農する以前は、コンピューター関係の学校を出て農業や酪農を目指していたわけではなかったそうです。他の牧場職員も「酪農は始めて」という方がほとんどだそうで、「何事も思いついたら、まずやってみよう！」が運営上のモットーになっているそうです。そんな気風・運営方針が、「牛のことが第一！」「牛にやさしい飼育」につながっているのだと感じましたし、そんな牛たちの生乳からできた牛乳（放牧酪農牛乳）とヨーグルト（放牧酪農プレーンヨーグルト）はおいしいに決まっている！とあらためて痛感してきました。

生協が出来ること

そんな牧場で生産された素晴らしい生乳ですが、現在はまだ100％放牧酪農とうたった乳製品として活用・販売されていないのだそうです。生産された生乳の60％は前述の「放牧酪農」の名を冠した牛乳やヨーグルトとして市販されていますが、残りの40％は一般の牛乳として販売されているのが実情だそうです。遠山場長の当面の目標は、そんな状況から早く脱して、100％「放牧酪農」の名を冠した製品として利用されることだと力を込めて話しておられました。生協としても、農業や酪農に携わる人が減っている中で、厳しい環境にある酪農の世界に身を投じ、明確な目標や夢を持った若い生産者たちががんばって生産した素晴らしい生乳を使った「放牧酪農牛乳」や「放牧酪農プレーンヨーグルト」の利用を増やし、少しでも早く100％「放牧酪農」製品として利用・供給される宣伝も含め、もっと頑張らなければならない！と強く感じて取材を終えてきました。

「いっしょにCOOPの読者の皆さん、ぜひ放牧酪農牛乳とプレーンヨグルトをご利用ください。また、合わせて宣伝の方もよろしくお願い致します」

地産地消企画部　橋本俊一

組合員の皆さんへメッセージ

みなさん　こんにちはー

牧場も春の風が快い季節となりました。牛たちも牛舎の柵から顔を出して暖かい日差しを浴びながら、気持ちよさげに日向ぼっこして放牧地をながめています。もう少し暖かくなると牧柵張りや草地整備等の準備を終えて、牧草も伸びた頃に放牧開始となります。

今年も牛たちが健康に育っておいしい牛乳を生産し、みなさんに届けられるよう社員・牛一同がんばりたいと思います。

㈱飯豊ながめやま牧場
遠山　和也

広げよう　平和への思い

北村山平和のつどいを開催しました

今年も2月11日の〝建国記念の日〟に各市町村の後援や協賛、そして各マスコミ関係の後援をいただき、「北村山平和のつどい」を開催しました。今年は、86名の参加がありました。

オープニングは、うたごえサークル〝レインボー〟のみなさんの歌で飾っていただきました。

始めに、天童9条の会の瀬野幸男さんより情勢報告として、現在国会で審議中の「テロ等準備罪（共謀罪）」法案について、現代の治安維持法と言われていることなどをわかり易く報告いただきました。続けて、芦野照雄さんより戦争体験のお話をお聞きしました。芦野さんは東根市在住ですが、生まれは満州で、日本に引き揚げて来るまでの体験談をお聞きしました。

▲オープニングは、うたごえサークル“レインボー”のみなさん

最後にアピールを読み上げて提案し、参加者全員の拍手で採択されました。

毎年恒例となっている戦時食体験では、「すいとん」と「蒸かし芋」を試食しました。どちらも、現代ではおかわりをするほど美味しく出来ています。

戦後72年が経過し、戦争体験を語り継げる方が年々少なくなっている中での体験談は大変貴重です。今後も、北村山平和のつどいでは、二度と戦争が起きることが無いように、戦争の悲惨さと平和の尊さを語り継いでいきます。

この日採択されたアピール文は、平和への願いが広がるように、山形県知事、各市町・マスコミ・政党へも送付しました。

組織部　安達幸麿

『協同組合』がユネスコの無形文化遺産に登録されました

国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）は2016年11月30日、無形文化遺産保護条約第11回政府間委員会において、「協同組合において共通の利益を形にするという思想と実践」のユネスコ無形文化遺産への登録を決定しました。

決定にあたってユネスコは、協同組合を「共通の利益と価値を通じてコミュニティづくりを行うことができる組織であり、雇用の創出や高齢者支援から都市の活性化や再生可能エネルギープロジェクトまで、さまざまな社会的な問題への創意工夫あふれる解決策を編み出している」としています。

協同組合は、人々の自治的な組織であり、自発的に手を結んだ人びとが、共同で所有し民主的に管理する事業体を通じて、共通の経済的、社会的、文化的なニーズと願いをかなえることを目的とした組織です。日本には農林漁業協同組合、労働者協同組合、労働金庫などさまざまな協同組合があり、生活協同組合（略称：生協）も数ある協同組合の一つです。

今回の登録は、全世界で展開されている協同組合の思想と実践が、人類の大切な財産であり、これを受け継ぎ発展させていくことが求められていることを国際社会が評価したものです。生協共立社では、今後も協同組合運動を発展させ「いつまでも住み続けられるまちづくり」をすすめていきます。